

現代アンダルシアの日雇い農民の文化をめぐって

—F. Talego Vázquez, *Cultura jornalera, poder popular y liderazgo mesiánico. Antropología política de Marinaleda.*—

塩見千加子

1. アイデンティティの危機にある日雇い農民
2. マリナレーダの事例と日雇い農民の文化

1. アイデンティティの危機にある日雇い農民

スペイン南部アンダルシア地方に特徴的なラティフンディオ latifundio (大土地所有) 農場では、伝統的に小麦やオリーブの収穫などの農繁期に土地をもたない日雇い農民 jornalero が大量に雇用されていた¹。しかし、1960年代以降農業の近代化により雇用機会が激減し、現在の日雇い農民はアイデンティティの危機に直面していると言われる。

もともとアンダルシアでは、19世紀後半以降日雇い農民の失業と生活レベルの低さが深刻な社会問題となっており、アナーキズム、社会主義、アンダルシスモ Andalucismo (アンダル

シア地域主義もしくは時期によってはアンダルシア・ナショナリズム)などの思想のもと、雇用条件の改善を求める労働運動が盛んに起こっていた。そして、この社会問題の原因として大土地所有制が問題視され、農地改革の実施が要求された。しかしこうした運動はすべて、スペイン内戦 (1936 - 1939 年) で勝利をおさめたフランコ Franco 将軍の独裁政権 (1939 - 1975 年) によってうちきられた。

Moreno Navarro は、アンダルシアの日雇い農民、さらにはアンダルシア人のアイデンティティは、今日までつねに社会問題の解決策としての農地改革に対する希望をよりどころにしていると論じる²。しかし、農地改革が実現するかどうかは別問題で、1960年代のラティフンディオ農場を考察した Martínez Alier は以下のように述べている。「実際に土地分割が行われるとは日雇い農民は信じていない」。しかしながら、「日雇い農民は土地分割を行うほうがさま

¹ 日雇い農民に関する先行研究は膨大に存在しここではとても言及できないが、アンダルシア農業経済史家である Bernal がこれに関する先行研究を次の論文において整理している。Bernal, Antonio Miguel, 2000, "Sobre campesinos y jornaleros. De la historiografía tradicional a recientes investigaciones", en González de Molina, Manuel (ed.), *La historia de Andalucía a debate. I. Campesinos y jornaleros*, Universidad Provincial de Granada, Anthropos, Rubí (Barcelona), pp. 207-221.

² Moreno Navarro, Isidoro, 1993, *Andalucía. Identidad y cultura*, Editorial Librería Agora, Málaga, pp. 43-51.

ざまな理由から不条理な現状よりもずっとよいと考えている。なぜならば農場は本来可能な生産性をあげていない。なぜならば「領主たち señoritos」は労働にも生産に対しても何の力ももたないからである」³。また González は、1960年代以降スペイン北部や他のヨーロッパ諸国の工業地域へ移民した多くの人々について、日雇い農民は次のように考えていると指摘する。移民によって得られた常雇用は「自身の日々の経験からすると信用できず、また心から望んでいるわけではないひとつの考えにすぎない。したがって、昔からの土地所有の魅力のほうがこれよりも勝っている」⁴。このように当時は、フランコ体制下で民主政治はありえず、また農業の機械化が急激に進展したため、農地改革の実現などとても不可能であったにもかかわらず、González も述べるように、日雇い農民のアイデンティティは土地分割への「ユートピア的希望」に支えられていたと言えるだろう⁵。

しかし、1975年フランコの死後民主化の過程のなかでアンダルシーアでも自治権獲得の機運が高まると、農地改革の実施の要求は再び息を吹きかえした。そして実際1984年にアンダル

シーア農地改革法が公布され、日雇い農民の積年の念願がかなうかにみえた。しかし、構想されたものが抜本的な改革をめざすものではなく、経済的合理性のもと耕作されている農地は適応の対象外とされたため、さらに内容の一部に違法判決が出たこともあり、ほとんどのラティフンディオ農場はまったく手をつけられな

いまま、農地改革は中途半端に終わった。したがって、農業の近代化がさらに進み農業労働がますます減少するなかで、日雇い農民は、完全に機械化することができずいまだ大量の人手を必要とするオリーブの収穫の時期だけは農場で働くが、これ以外は他のセクターの仕事に就いている。つまり日雇い農民は、「農業－建設業・観光業など」のあいだをつねに自由に動くことができる労働力となってしまった⁶。

彼らの生活やアイデンティティにさらに大きな影響を与えたのは、失業日雇い農民に対する助成制度の導入であった。1984年、公的資金をもちいて都市インフラの整備を失業日雇い農民にさせる農村雇用計画 Plan de Empleo Rural (PER) と、農業失業保険制度 Subsidio de Desempleo Agrario が施行された⁷。Sánchez López

³ Martínez Alier, Juan, 1968, *La estabilidad del latifundismo. Análisis de la interdependencia entre relaciones de producción y conciencia social en la agricultura latifundista de la Campiña de Córdoba*, Ruedo Ibérico, París, p. 78.

⁴ González, Juan Jesús, 1989, "El discurso jornalero. Desarticulación de la conciencia de clase y pérdida de identidad", *Agricultura y Sociedad* 50: 33-73, p. 37.

⁵ Ibid, p. 40.

⁶ Sánchez López, Antonio J., 1980, "La eventualidad, rasgo básico del trabajo en una economía subordinada. El caso del campo andaluz", *Sociología del Trabajo* 3-4: 97-128, p. 109.

⁷ すでに1971年から同様に公的資金を都市インフラの整備にあてて失業日雇い農民を救済する制度（共同雇用制度 Empleo Comunitario）があったが、これは単に失業リストにのっているだけで日雇い農民以外にも適用されるという事態になり改善が強く求められていた。PERは農業失業保険を受けるための要件となりうる点で前制度とは異なる。つまり、農業失業保険の適用を受けるには、前年に60日間の農業労働を行うことが要件となるが、この60日のうち半分までをPERによって補ってよい。農業失業保険は、年間最大180日、金額は規定最低賃金の75%に匹敵する額である。なお、PERは1997年名称が変わり、また農業

は、これらの制度の導入は、「国家が農業地域の労働力を工業のための予備軍として見なすことを公に支持し」、日雇い農民の失業に対するより確実な措置の制度化を拒否したことを意味すると指摘する⁸。また González は、失業助成制度の導入の結果、労働組合は本来の機能を失い、「失業と社会的コンフリクトを緩和するために公的資金獲得に奔走する行政側のエージェントになり果てた」と述べている⁹。

こうした状況で日雇い農民は、農地改革によって得られるわずかな所有地において農業経営を行うのでは、これに必要な労働と得られる収入のあいだのバランスがとれず、リスクが大きすぎると考えているため¹⁰、もはや有効な失業対策として土地分割を望んではない。それよりは他のセクターに安定した職を得ることを望んでいる。ただし、失業率が高い現状ではこれは不可能であり、わずかな農業労働と他のセクターへの出稼ぎ、そして失業助成制度に依存せざるをえない。

この結果日雇い農民は、職業意識自体まで失いつつあり、そのアイデンティティは危機にあると考えられる。Gavira Alvarez は、現在の日雇い農民を次の3つに分類する。第一に「日雇

い農民である。つまりもっとも強い要求をもち、歴史的アイデンティティの継承者」である。第二に「いかなるセクターにおいても働く準備があり賃金労働者として生計をたてることに関心のある農業労働者 obrero agrícola である。彼らは工業労働者と同様の抵抗・要求手段を用いる」。そして第三には「国家の助成に依存する福祉国家のクライアント」である¹¹。したがって、日雇い農民はもはやひとつの社会集団として存続の危機にあると言えるだろう。

2. マリナレーダの事例と日雇い農民の文化

ところが、このような状況のなかで、例外的に自身のアイデンティティを保持し活発な労働運動を展開しているのが、社会人類学者 Talego Vázquez が調査したセビーリャ県マリナレーダ市 Marinaleda の日雇い農民たちである¹²。

マリナレーダの運動は、1976年に結成された農業労働者組合 Sindicato de Obreros del Campo (SOC) のマリナレーダ地方支部の組合員、とくに支部長であり同時に 1979 年以降今日までマリナレーダ市長をつとめているフアン・マヌエル・サンチェス・ゴルディエリョ Juan Manuel Sánchez Gordillo を中心として展開している。SOC は、スペイン共産党 Partido Comunista

労働の雇用機会のさらなる減少により 60 日という要件は 35 日まで引き下げられた。失業助成制度については次の文献に詳しい。Palenzuela Chamorro, Pablo, 1996, *Buscarse la vida. Economía jornalera en las marismas de Sevilla*, Area de Cultura, Ayuntamiento de Sevilla, Sevilla.

⁸ Sánchez López, op. cit., pp. 102-103.

⁹ González, op. cit., pp. 39-40.

¹⁰ Sánchez López, op. cit., pp. 122-123.

¹¹ Gavira Alvarez, Lina, 1993, *Segmentación del mercado de trabajo rural y desarrollo. El caso de Andalucía*, Servicio de publicaciones Agrarias del Ministerio de Agricultura, Pesca y Alimentación, Madrid, pp. 38-39.

¹² Talego Vázquez, Félix, 1996, *Cultura jornalera, poder popular y liderazgo mesiánico. Antropología política de Marinaleda*, Fundación Blas Infante, Universidad de Sevilla, Sevilla.

Española (PCE) から分裂したスペイン労働党 Partido de Trabajo de España のもとセビーリャ県東部一帯で 1975 年に結成された日雇い農民委員会 Comisiones Jomaleras を前身として、1976 年、アンダルシーア地方レベルの労働組合としてアンテケーラ Antequera の大会で設立された¹³。「進歩とは... 食べないことか? Progresar... ¿es no comer?」(1979 年)と題された冊子には、SOC の綱領が以下のようにまとめられている。第一に、機械化は社会的および生態的な利益の保護のために反対する。第二に、綿花の栽培など多くの労働力を必要とする「社会的作物」を保護する。第三に、失業日雇い農民のための助成制度を確立する。最後に、農地改革を実施する。SOC の組合員はこれらの目標を達成するために、とくに 70 年代末から 80 年代前半にかけて、ハンガーストライキ、農場占拠、セビーリャ市へのデモ行進など活発な運動を行った。マリナレーダでは、1980 年 8 月 17 日、約 700 人がハンガーストライキを決行、この出来事は全国紙でも大々的に取りあげられたためスペイン中に大きな反響をよびおこし、これ以降マリナレーダは、つねに「アンダルシーア農

業地域の社会的コンフリクト、つまり失業や矛盾した土地所有制に対する抗議行動と関連づけられるとともに、後に見るような、「「参加型政治」、「全体集会 Asamblea」、「民衆の力 poder popular」などの言葉で表現されるマリナレーダに特有な政治形態と結びつくことになった」(pp. 91-92)。SOC はさらにローカルレベルの政治にも進出した。労働者統一候補 Candidatura Unitaria de Trabajadores (CUT)¹⁴ というグループをまとめ、民主化後初の地方自治体選挙が行われた 1979 年以降、アンダルシーアの多くの自治体で CUT の市長や市会議員が誕生した。また、先述したアンダルシーアの自治権獲得運動にも SOC の労働運動は大きな影響をおよぼした。

マリナレーダはこうした日雇い農民の運動の中心にありつねに注目されていた。そこで以下では、まず最初に Talego Vázquez の著書の内容を追いつ、その後あらためてアンダルシーアの日雇い農民のアイデンティティと文化について考えてみたい。

マリナレーダで行われている政治実践は、政治参加が投票のみに制限されている西欧的民主主義とは異なり、「民衆の力」を存分に提示するものであるという (p. 18)。具体的には、日雇い農民の生活レベルの向上を求めるための行動である「闘争 lucha」、町の清掃など都市インフラを整備するために賃金報酬なしで行われる「ボ

¹³ SOC については以下の論文にも詳しい。Benítez Jiménez, Joaquín, 1996, "Jomaleros de la Sierra Sur: 1975-1996. Un camino hacia la dignidad", *Mediodía. Revista del Centro de Profesores de Osuna (Sevilla)* 2: 173-180.; Entrena Durán, Francisco, 1994, "El SOC. Un caso de reacción campesina ante la modernización rural", *Revista de Fomento Social* 49: 285-316.; Morales Ruiz, Rafael, 1997/98 "Desarrollo y transformaciones históricas en el Sindicato de Obreros del Campo (1976-1994)", *Sociología del Trabajo (nueva época)* 32: 31-51.; Morales Ruiz, Rafael, 2000, "Aproximación a la historia del Sindicato de Obreros del Campo de Andalucía", en González de Molina, Manuel (ed.), *La historia de Andalucía a debate. I. Campesinos y jornaleros*, Universidad Provincial de Granada, Anthropos, Rubí (Barcelona), pp. 179-206.

¹⁴ CUT は 1987 年、統一左翼 Izquierda Unida (IU) に組みこまれた。

ランティア労働」、そして「全体集会」の主要な3つの活動への参加が日雇い農民によって日々実践されている。こうした政治形態は近隣の町ではまったく見られない。そこで著者は、この政治形態の結果、マリナレーダでは「日常生活、日常のソシアビリテだけではなく、祝祭や儀礼的コンテクストもまた、普通アンダルシアの町に共通するものとはまったく異なるものになる」(p. 18)と考えている。それではこうした特殊な政治形態がなぜマリナレーダで実現可能になったのかと問題提起をすることができるが、著者は仮説として次のように述べている。「マリナレーダで「民衆の力」が可能となったのは、まず日雇い農民の「文化」による。また、フアン・マヌエルというマリナレーダ出身の若いラディカルな教師が、民主化の政治不在の状況に、カリスマ的リーダーとして突如現れたため、彼が最初から体現していた政治的・イデオロギー的な提案がマリナレーダの住民に簡単に浸透したのではないだろうか」(p. 22)。したがって本書の目的は、第一に、フアン・マヌエルというリーダーがどのように生まれ、強化されたのかを分析することである。フアン・マヌエルは「マリナレーダの政治構造が依拠する政治的・イデオロギー的言説を左右し発展させることを許された唯一の人物である」(p. 19)という。第二の目的は、「「労働の文化 *cultura del trabajo*」との関連において、「民衆の力」による政治実践を正当化する言説の内容を理解する」(p. 20)こと

である。「民衆の力」とは、「これをつくる日雇い農民の世界と位置づけを説明する、包括的で凝集的、あるいは凝集的であろうとする概念としてとらえられる」(p. 20)。一方、「労働の文化」は、Moreno Navarro の定義¹⁵にしたがい、「何らかの労働プロセスにおいてその労働に特有の経験を通じて生み出され、ある社会的な個人や集団がもつにいたる振る舞いや習慣、知恵、態度、価値観、さらに感情をもふくんだ総体」(p. 21)と定義できるが、「労働の文化」をもつ者は、政治実践を正当化する「言説のなかで自己を認識し、その言説を自分のものとし、その言説を自身が関わる問題を説明するための装置として用いることによって、その政治構造を支持している」(p. 20)と、著者は考えている。

本書はこのような前提のもと具体的な考察に入っている。マリナレーダの人口は 2518 人(1991 年)(p. 28)であり、近隣のエシハ Ecija、オスーナ Osuna、エステーパ Estepa などのラディンディオ地域に特有な大規模な町¹⁶と比較した場合、人口規模・市域面積はきわめて小さい。しかし農業従事人口は、全労働人口の約 78% (1991 年)(p. 41)を占め、近隣の町に比べるとめだつて多い。ただし、その大部分が土地を所有しない日雇い農民であり、土地所有者

¹⁵ Moreno Navarro, op. cit., pp. 53-67.

¹⁶ この大規模集落は「アグロタウン *agrotown*, *agro-ciudad*」とよばれ、伝統的に農業セクターが優勢であるが、人口が 3000 人から数万人規模になるので、農村と都市の両方の特徴をもつと定義される。

はわずかに存在するのみである。しかもこのほとんどすべてが中小規模の土地の所有者であり、市域にはわずかにラティフンディオ農場があるが、地主は不在で、近隣の大規模な町に居住することが多いという (pp. 18-19)。しかしながらマリナレーダでも、近隣の町で認められるように、「土地をもつ者」と「土地をもたない者」の社会的経済的な格差は非常に大きく、「土地をもたない者」は「土地をもつ者」に経済的に従属しているが、同時に両者は対立関係にある。とくにマリナレーダでは、「土地をもたない者」がフアン・マヌエルという指導者のもとにかく結束し「土地をもつ者」に対してさまざまな要求行動を行っているため、両者の対立関係は、他の町よりも激しいと考えられる。またこの対立関係は経済的な面だけではなく、ローカル政治、友人関係、フィエスタなどさまざまな面やシンボルにまで影響をおよぼすことを本書は考察している。

次に、政治的・社会的な民主化過程を考慮しながら、先述した直接行動、つまり「闘争」、「全体集会」、「ボランティア活動」などが具体的に検討されている。そのなかでフアン・マヌエルの組織のリーダーとしての要件が分析されているが、すべての人が顔見知りである小さな町では、個人的な信頼性が第一に必要となる。さらにこれに加え、知的な資質が求められるという。マリナレーダのような「知っている者」と「知らない者」との格差が大きい社会では、知的な

資質はとくに大きな影響力をもつことになると著者は論じている (p. 133)。さて、こうした直接的な政治実践がくりかえし行われた結果、ついに 1991 年アンダルシーア自治州政府は、計 1159ha の土地をマリナレーダの日雇い農民に譲渡することを決定した (p. 219)。アンダルシーアの他の日雇い農民がもはやかなうことはいとあきらめていた土地を獲得したのである。こうしてマリナレーダでは、直接参加の政治実践と協同組合農場の経営の両方が実現した。Talego Vázquez がよぶように、マリナレーダは「資本主義の海のなかの孤島」(p. 27)になったのである。

さらに、マリナレーダの「民衆の力」に對置される「対立者 *contra*」とよばれる集団についても考察される。これに属する人々は結果的に団結するのが非常に難しく、「民衆の力」を支持しない人々はすべてこのカテゴリーにあてはまると考えられる。1979 年以降 4 年ごとに行われた地方自治体選挙の結果近隣の町では与党となっている、民主中道連合 Unión de Centro Democrático (UCD) やスペイン社会労働党 Partido Socialista Obrero Español (PSOE) の議員がマリナレーダ市議会で唯一できることは、議事進行の立会人となることだけであった (p. 243)。CUT はつねに、全体の約 70% の票は獲得していたからである。したがって、「対立者」の政治的影響力はきわめて小さかった。

しかしながら、日雇い農民と「対立者」のあ

いだの小競りあいはい日常的に起こっていた。政治面においてだけではなく、街路の名前、祝祭、聖週間のプロセッションなどにおいても、両者のイデオロギー的・政治的言説は明確に現れた。そこで両者の対立は、「経済的な基盤、つまり土地闘争や搾取の問題などにもとづくのではなく、政治的・イデオロギー的レベルに位置づけられるものであり、他の場所では類を見ないほど過激である」(p. 260)と著者は述べている。

ところが、マリナレーダの運動は80年代半ばを機に徐々に衰退していく。そして90年代になり、「イデオロギー的言説と日雇い農民の「労働の文化」のあいだの関係性」において「民衆の力」は危機にあると、著者は述べている(p. 261)。これは80年代後半以降「労働の文化」に生じた変化によると考えられる。その変化のうちもっとも重要なもののひとつが、上述した失業助成制度の導入である。失業保険によって毎月定期的な収入を得られるようになったことは、日雇い農民の生活にとっては重大な変化である。この収入によって贅沢品には手が届かないものの最低限の生活必需品を手に入れることができるようになり、生活レベルは格段に向上したからである。その結果、もはや大規模な労働運動は必要ではなくなったのである。

いずれにせよ、70年代後半から80年代にかけての運動は多くの日雇い農民を巻き込み、またマリナレーダ以外の人々の注目も集めたという点で、その意味は大きい。当時全国レベルで

複数のセクターで組織化をしていた労働者委員会 Comisiones Obreras (CCOO) などの大規模な労働組合でさえ、日雇い農民の希望であり SOC の最大の目的であった農地改革の実施に関してはややと譲歩したため、SOC ほどに日雇い農民をひきつけることはできなかった。SOC のメッセージがマリナレーダの日雇い農民の大部分に急速に浸透した理由を著者は4つあげている。第一に SOC は日雇い農民が強いられていた社会経済的に不安定な状況に明確な解決策を提示したということ、第二に町社会構造の特異性、第三に労働組合の代表を当初からつとめていた人物の社会的影響力が大きかったこと、最後に SOC と同様な政治的機能をもつ組織が他になかったことである (pp. 95-96)。

最初に述べたように、一般的にアンダルシアの日雇い農民のアイデンティティは現在危機に直面しているが、マリナレーダでは他の町の日雇い農民ほど危機的状況にあるとは思われない。この理由としては、強い支配力をもつリーダーの存在にとくに注目しなければならない。

「民衆の力」を体現しているリーダーであるフアン・マヌエルは、マリナレーダの日雇い農民に対して「メシア的言説」を発し続けていると Talego Vázquez は論じている。ただし、著者が言う「メシア的言説」とは、Hobsbawm が用いた意味で、前近代的な宗教運動と近代的な政治運動のあいだに明確な違いを想定するものではない。「イデオロギー的な次元と実際の社会的

実践のあいだの関係について、これまであまり取りあげられなかったので」(p. 24)、マリナレーダの事例を手がかりにしてこれを分析することを、著者は本書で試みている。そこで著者は、「メシア的なもの」は、ある政治的「言説を特徴づける歴史を認識することに由来する」と考えている(p. 24)。そしてこの歴史認識とは、「現代の他の政治的言説と同様に、時間の外にある理念社会において「真に人間的」な価値を見いだすことによって、必然的にその理念社会に到達するプロセスとして歴史をとらえることである。つまり、政治実践が超越され trascendentalizado、神秘化され sacralizado、普遍的で目的論的な意味を獲得するための手続きのことである」(p. 24)と述べられる。実はマリナレーダだけではなく他の町においても、初期の SOC の運動のなかで、同様の言説をコントロールする強力な指導者がたびたび現れている。しかしマリナレーダのような徹底した政治実践は生まれなかった。マリナレーダの日雇い農民の運動が例外的に成功したのは、マリナレーダには伝統的に大土地所有者が居住しておらず、町の社会構造が他の町とはかなり異なるからであるとも考えられる。

しかし、マリナレーダにおいても日雇い農民の運動は最盛期に比べると衰退した。上述したように日雇い農民は失業助成制度や他セクターにおける労働にも依存するようになり、労働プロセスそのものが変化した結果、日雇い農民の

「労働の文化」とアイデンティティが危機に直面しているからである。マリナレーダの現在の日雇い農民でさえも伝統的な意味での「日雇い農民」とは言いがたいであろう。Talego Vázquez は、マリナレーダの今日の運動は、内戦以前の労働運動とは異なり、マスコミなどを通じて政治的な主役の地位を得ることを主要な目的として計画されているので、よりいっそう象徴的なものとなり、国家に対する直接的な要求となっていると指摘している(p. 211)。農業助成制度の導入を求める動きも国家に訴えるものであったし、現在労働組合が行っている活動のほとんどが行政との調整である。現在の SOC は明確な目的を失い、エコロジー問題などに取り組みながら方向性を探っている状態にある。したがって、農地改革の実現や農業助成制度の導入などのために闘っていた 80 年代前半の頃のような団結はもはやありえないと言われている。しかし、実現可能とは考えていないが、農地改革をいまだに究極の目的として掲げている。こうなると農地改革は、もはや経済的な問題ではなく、日雇い農民を唯一政治的・イデオロギー的な意味でのみ規定できる、最後のアイデンティティのよりどころであると考えられる。言いかえれば、日雇い農民は、もはや社会経済的な基盤をもたず、政治的・イデオロギー的な定義においてのみ存在する社会集団であるとも言えるだろう。

しかし他方、失業助成制度が逆に日雇い農民

の位置づけを一定の社会的枠組みに固定化したと、Talego Vázquez は別の著書で指摘する。これが導入される以前、日雇い農民は一年を通じてつねに仕事があるわけではなく、経済的・社会的に非常に不安定な状態にあった。それでも当時はまだ、日雇い農民にはいかなるセクターにおいても常雇用を獲得する可能性があり、実際多くの人々が 60 年代から 70 年代中頃まで工業地域に移民した。しかしながら先述したように、失業助成制度の導入は、アンダルシアに残った日雇い農民を「農業労働－建設業・観光業など－失業保険」という 3 つの生計手段に依存させる方向に迫りやった。したがって、「不確かな不安定 *precaridad inestable*」状態にあった日雇い農民は、失業保険を得たことによって、「確かな不安定 *precaridad estable*」状態に固定されたとも言えるだろう¹⁷。もっともこうした人々をまとめて「日雇い農民」とよぶことはもはやできないかもしれない。

本書は、フランコ体制崩壊後（あるいはすでに自給自足経済から開放経済移行し大きな経済成長をとげたフランコ体制後期の 1960 年代頃から始まっていたとも言えるだろうが）、スペインの政治、経済、社会が急激な民主化と資本主義化の波にさらされるなかで、アンダルシアの農業中心の小さな町に住む人々がこの変化から自身の生活やアイデンティティを守るために、

どのようにこれに抵抗しそして適応してきたのかを、ローカルレベルから検討するための良い参照事例となる。そして、アンダルシア現代史のなかでつねに農業問題と関わって論じられ形成されてきたアンダルシア人のアイデンティティについても、その近年の変化を考えるための材料になるだろう。

(しおみ ちかこ・東京外国語大学大学院博士後期課程)

¹⁷Talego Vázquez, Félix, 1996, *Entre el trabajo y los subsidios de desempleo. Los jornaleros de Lebrija*, Hermandad de los Santos de